

標準語化と言語の消滅 —地域言語の特徴とその歴史言語学的研究における 価値—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菊澤, 律子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00000942

第4章 標準語化と言語の消滅

— 地域言語の特徴とその歴史言語学的研究における価値¹⁾ —

菊澤 律子

国立民族学博物館／総合研究大学院大学

本稿では、言語の多様性の消失のなかでもとくに標準語化にともなう地域言語のさまざまな特徴の消失に焦点をあてる。マダガスカルの諸地域言語におけるいくつかの具体例について、それらが言語の歴史的再建においてどのような役割を持つのかを示しつつ、標準語化により失われてしまうのは単にそれぞれの言語の豊さだけではなく、祖語再建、ひいては歴史研究の手がかりとなりうるかけがえのない情報も含まれているのだということを示す。

- | | |
|------------------------------|------------------------|
| 1 はじめに | 4.1 2つのマラガシ語における代名詞の体系 |
| 2 マラガシ語 | 4.2 代名詞に反映される歴史 |
| 2.1 系統的な位置づけ | 4.2.1 三人称代名詞の比較研究 |
| 2.2 マダガスカルの地域言語 | 4.2.2 再建形に反映される歴史 |
| 3 語データと先史研究 (I) : サトイモ科植物の名称 | 5 まとめ |
| 4 語データと先史研究 (II) : 代名詞 | |

* キーワード：マラガシ（マダガスカル）語，地域言語，サトイモ科植物，代名詞，標準語化

1 はじめに

言語の危機に関する議論の中でしばしば欠けている視点のひとつに、標準語化による地域言語の消失がある。公的に標準語が存在する言語の多くには通常、標準語以外に多くの地域言語、いわゆる「方言」が存在しており、たとえば筆者の母語である日本語や、筆者がとくに地域言語に注目してフィールドワークを行ってきたフィジー語やマラガシ（マダガスカル）語も例外ではない²⁾。地域言語の話者はなんらかの形で標準語を併用して暮らしているため、地域言語は標準語からの影響を避けられない。それぞれにおいて標準語からの影響がどのような形で現れるかについては様々な要因により一定ではないが、結果としてそれぞれ固有の特徴が対応する標準語の要素に置き換わり失われてしまう傾向がある、という点では共通している。

標準語が存在するような言語は一般的に話者数が多く、言語の消滅・危機に関する議論において対象となることはない。1億2200万人の話者を誇る日本語が危機に瀕していると考えられるものはだれもいないであろうし、話者数33万人のフィジー語、1000万人のマ

ラガシ語 (Gordon 2005) についても状況は同じである。しかし、日本語の様々な地域言語は標準日本語の強い影響をうけて明らかに変化しているし、フィジー語やマラガシ語においてもその状況は変わらない。

標準語化は、語彙項目、形態的特徴、音韻体系など、言語のあらゆる特徴において起こりうる。日本語におけるさまざまな語彙が若い話者の間で失われつつあることは、一般によく認識されている。たとえば、大阪府天満出身の筆者の祖母 (1908年生) は、「日ぐれごろ」(SJ. 夕方)、「おじゃみ」(SJ. お手玉)、「おなごしさん」(SJ. 女中さん) のような語を日常的に使用しており、筆者の母 (1945年生) もこれらを理解し、また自身も使っていた時期があったが、筆者の弟 (1975年生) はこれらの語を耳にしても意味が理解できない。語彙のみではなく、動詞の活用語尾や文末詞も標準語の形に同化するし、音韻的特徴についても、子供たちが読み書きを学校で習うにつれ、「方言」形の使用が順に消えてゆく。筆者が暮らしたことのある滋賀県の一地域では、たたく /tataku/ の実現形が [tadaku] であるなど、特定の無声子音が母音間で有声化するが、この発音が維持されるのは小学校低学年までだという印象を受けている。

地域言語にみられる特徴の消失は地域文化の衰退に直結し、また言語の総体としての豊かさの消失にもつながるため、このことだけでも十分考察に値する。しかしここでは地域言語の特徴の喪失が、言語、ひいては話者の歴史を知るための情報の喪失をも意味する点に特に注意を喚起したい。一般にはあまり認識されていないが、このような情報の喪失は、最近まで書記法を持っていなかった社会においてはとくに深刻である。現在話されている複数の言語を体系的に比較することで言語の変化や系統関係を知ることができ、さらにその変化の過程をたどることで記録以前の時代における史的事実を知ることができるが、その方法が先史社会について知るための重要な手がかりとなるからである。また、物理的には何も痕跡が残らず、考古学では扱うことのできない社会システムや他の文化的慣習についても、言語の情報にもとづいて関連する語彙 (用語) を再建することで、その一面を理解する唯一の手掛かりとすることができる。

本稿では以上のような点を示すために、次節でまず、マラガシ語の言語学的背景について概略を述べた後、第3節では、重要な有用植物のひとつであるサトイモ科に属する植物を表す一連の語彙を呈示し、過去の人々の生活に関する推論を引き出すためにどのようにデータが活用されうるかを示す。第4節では、マラガシ語のいくつかの地域言語にみられる代名詞の形について述べる。比較および (祖形) 再建の方法について詳しく検証することは本稿の目的ではないので他の機会に譲ることにし、ここでは、データに歴史的な事実がどのように反映されているか、について、三人称代名詞を例として示す。

本稿で示す例を含め、地域的特徴は、ひとたび話者のコミュニティでなんらかの社会的条件が整えば比較的短期間で失われてしまう可能性がある。地域言語は、標準語あるいは他の言語一般と比べて、とくに「普通でな」かったり、「珍し」かったりする特徴を

もつわけではない。けれども、系統的に近い言語のグループ内でみられるバリエーションは、そのグループの大小に関わらず、言語の史的変遷の過程を明確にするための重要な情報を担っていることが多い。その意味において、標準語化による地域言語の消滅は過小評価されるべきではない。

2 マラガシ語

2.1 系統的な位置づけ

マラガシ語はオーストロネシア語族に属する言語である。オーストロネシア系の言語は太平洋および環太平洋諸地域に分布しており、マラガシ語のみがインド洋をはさんで他とは離れた地域で話されている。これは、ボルネオ島の東南バリト諸語群から7～8世紀ごろ分岐した結果であると見られており³⁾、この年代が正しければマダガスカルへの人の移動は、今から約5000年前ごろに台湾を発して南方にひろがったオーストロネシア系の言語を話す人々（以後、国立民族学博物館 2007に従い「オーストロネシアン」とする）の初期移動の流れ（Bellwood *et al.* 2011; 菊澤 2007にサマリー）の一部をなすものだと考えにくい。むしろ、インドネシアに人が定住してしばらくたった後に、なんらかのきっかけでマダガスカルへの人の移動が起こったのだということになる（Adelaar 1991, 1995; Dahl 1991）。

東南アジアの海岸部および島嶼部における交易網はインド洋における海上交易ネットワークにつながっていた。ボルネオ島の南に住んでいた東南バリト系の言語を話す人々のグループがインド洋を超え、マダガスカル島に一時的に立ち寄るのみならず定住したのは、このネットワークにのったものだという考え方もあるが、詳細はまだわかっていない。いずれにしても、マダガスカル島はオーストロネシア語族の飛び地となり、マダガスカル言語はそれ以降、この地で独自の発達を遂げることになった。

2.2 マダガスカルの地域言語

オーストロネシアンが最初に定住してから今日にいたるまでマダガスカル島では大きな多様化が起こり、これは民族と言語の双方に反映されている。現在のマラガシ語には、非オーストロネシア系の言語、たとえばバンツー系の言語、アラビア語、サンスクリット語などの影響が認められ、マラガシ語の研究においてはよくみられる研究テーマのひとつとなっている（Dahl 1988; Dez 1994; Ferrand 1905; Razafintsalama 1928; Adelaar 2010他）。インドネシアで話されているオーストロネシア系の複数の言語の影響もみられるとされるが、これについては、マダガスカルに移動する前の民族の歴史を反映しているとする立場（Dahl 1991）、逆に、定住後に続いた太平洋側との交流の痕跡とする立場（Adelaar 1991, 1995）双方が存在する（Blust 2006も参照）。

Ethnologue (Gordon 2005) には、現在、マダガスカルで話される言語として、10の言語があげられている。マダガスカル島が南北1000キロ以上にわたっていることを考えると、この数は決して多くはないし、また十分だとも思われない。マダガスカルでは、地域言語については18の民族的グループの名称（図1）に絡めて言及するのが慣習となっており、本稿でもそれを踏襲するが、地域言語に関してはそれ以上には把握されておらず、マダガスカル島の言語地図も一般には流布していない。標準マラガシ語は、主都アンタナナリヴのある地域、メリナの人々により話される地域言語のひとつにもとづいている⁴⁾。

これらの地域言語が互いにどれほど違っているのか、については、対立する2つの記述がみられる。たとえば Deschamps (1936) は、メリナと他の地域の言語とでは、お互いに理解できないほど異なっている、と述べる。

メリナ語は、他の言語とはかなり異なっており話者も少数であるが、タナナリヴェが権力を持つようになった結果、研究者の関心を独り占めにすることになった。……この言語はマダガスカルの人々のほとんどがよく理解できないにもかかわらず、「マダガスカルの言語」として紹介され、また教えられてきた。(Deschamps 1936)



図1 マダガスカルにおける民族グループ

一方Dyen (1971) は、van der Tuuk (1865) を引用しつつ、地域言語間には違いがほとんどないと述べている。

地域言語間での意思疎通における相互理解が可能であることは間違いないようだ。van der Tuuk によれば……マダガスカルには様々な地域言語が存在する……が、異なる地域から来た人がお互いに理解できないほど多数ではなく、多少の実践により会話が可能になる。(Dyen 1971: 211)

マダガスカル北東部のベチミサラカ地域ヴァヴァテン（首都から約1日半）とその周辺地域に滞在した筆者の経験からは、離れた地域から来た2人のマダガスカル人が、それぞれ出身地域の言語のみを使って会話をしたとしたらコミュニケーションに問題が生じる（＝「通じない」）であろうと思われる。実際に、ベツィミサラカの中心地タマタヴからヴァヴァテンに向かう乗り合いバスの中で、知り合いを訪ねてきたと思われる数人のグループがドライバーとの意思疎通ができず、他の乗客がこぞって助け舟を出そうとする場面が見られた。一般的にそのような状況が起こった場合には、お互いに相手の使う語彙や表現に配慮しつつ、徐々にコミュニケーションをとりうる形を作っていくようになることが多い。これはDyenが述べるところの、「多少の実践により会話が可能になる」ことに当たるとと思われる。

現在、教育やメディアなどで使われている標準語の広がりには、マダガスカルにおける地域を越えたコミュニケーションを可能にしている。話者が標準語を共有している場合、それぞれが自分の言語のみで話すと相互理解が難しい場合でも、標準語を介することで意思疎通が可能になるが、このことは、日本やフィジーでの状況にも当てはまる。マラガシ語話者で自分の語の地域外に一定期間住んだことがある者は、言葉が通じなかった経験を通して異なる地域言語の存在を強く認識している。それと同時に、標準語を話すことでコミュニケーションが可能であるということもよく認識しており、たとえば筆者のように標準語以外の地域言語を学ぼうとする外国人に対しては、よく、「外国人は“メリナ語”を学ぶべきであり、そうすれば“マダガスカル全土どこでも”通じるようになる」というアドバイスが聞かれることになる。

マダガスカルで話される言語にはたいへんな多様性がみられるが、このことは特に、実際にマダガスカルを訪れたことがなかったり、あるいは訪れたことがあっても首都でしか調査したことがない研究者には広く認識されてはこなかった。地理的・政治的な理由で現地調査が必ずしも容易でないこともあり、その豊かな地域言語については十分な記述も記録もない。したがって、マラガシ地域言語間の系統関係についての研究は限られており、また二次データにもとづくものが多い (Vérin *et al.* 1970; Serva *et al.* 2011)。今後、地域を網羅した基礎的な言語データの収集が必要とされている。

3 語データと先史研究（Ⅰ）：サトイモ科植物の名称

マラガシ語の地域言語に関する網羅的な比較（歴史）言語学的研究は限られているが（ただし Mahdi 1988），限られた語彙の組み合わせについていえば，比較研究の文脈でとりあげられてきたものは少なくない。ここでは，そのひとつである食用のサトイモ科植物を表わす語彙をとりあげ，これらの語を比較することでどのようなことがわかるのか，Beaujard（2004）および崎山（2009）の概観に追加データを加味して紹介する。

マダガスカルには，他のオーストロネシア系の言語が話されている地域にはみられない一連の植物が生育している。そのなかの1つ，ティフォノドルム（写真1）は，クワズイモ（写真2）に似た形状を持つ。ただし，この2つの生育環境は異なっており，前者の分布はタンザニア，コモロ諸島，およびマダガスカルと周辺の島々のみであるのに対し，後者は東・南・東南アジアおよび太平洋全域でみられる（Royal Botanic Gardens, Kew, 2012年1月28日）。

クワズイモは太平洋地域で一般的にみられるが，クワズイモを表す語もオーストロネシア系の言語にひろく存在しており，音韻対応が規則的であることから（1）のように共通祖語であるオーストロネシア祖語への再建も可能である。このことからクワズイモがオーストロネシア祖語の段階から現在まで人々の生活に存在しつづけてきた植物であることがわかる（菊澤 2003）。



写真1 ティフォノドルム
(*Typhonodorum lindleyanum*)

写真2 クワズイモ (*Alocasia* sp.)

(1) クワズイモを意味する語の再建形 (Blust ACD, 2012年1月29日)

オーストロネシア祖語 *biRaq

オセアニア祖語 *piRaq

マラガシ語においては、オーストロネシア祖語 *biRaq から受け継がれた語として *vià* および *viha* という形がみられるものの、(2) にみられるように、これらはいずれもクワズイモではなくティフォノドルムを意味する。

(2) マラガシ諸語における主要なサトイモ科植物の名称 (I)⁵⁾ティフォノドルム *Typhonodorum lindleyanum*

(和名および英語の一般名はない。英語では、クワズイモの一般名にならない ‘elephant-ear taro’ と呼ばれることがある。)

<i>vià</i>	BSK.	(著者の調査データ)
<i>viha</i> ~ <i>vihana</i>	SKL, SHN, BSK, TNL, BTL	(Boiteau <i>et al.</i> 1997)
<i>ambia</i>	BSK. (< <i>an-</i> + <i>via</i>)	(Boiteau <i>et al.</i> 1997)

クワズイモとして再建された語 *biRaq から発達した語がマラガシ諸地域言語でみられること、ただしその語が別の植物を指すという事実から、マラガシ語話者の先史について次のことがわかる。

まず、オーストロネシアンがマダガスカル島に移住したときにクワズイモを示す語彙

をもっていたことから、この人々はクワズイモのことを知っており、かつ利用していたのだということがわかる。ところが、マダガスカルにはクワズイモのかわりにティフォノドルムが生えていた。ティフォノドルムがクワズイモとよく似ており、かつ同じように食用となることから、新たに利用をはじめたティフォノドルムをそれまでクワズイモを示すのに使っていた語で呼び始めたのであろう（新しい植物への語彙の転用例については、たとえば Wolff 1994参照）。

今日では、クワズイモもマダガスカルに広く分布しており、それではクワズイモがマダガスカル島で用いられるようになったのはいつなのか、について疑問が生じることになる。これについては、マラガシ諸語におけるクワズイモとサトイモ（写真3）を示す語彙を検討すると、その経緯が明らかになる。



写真3 サトイモ（もしくはタロイモ, *Colocasia* sp.）

(3) マラガシ諸語における主要なサトイモ科植物の名称 (II)

a. クワズイモ *Alocasia macrorrhizos* (‘elephant-ear taro, giant taro’)

<i>saonjobia</i>	‘BSK., LIT. <i>via</i> -like taro’	(Boiteau <i>et al.</i> 1997)
<i>saombia</i>	‘BSK., LIT. <i>via</i> -like taro’	(Boiteau <i>et al.</i> 1997)
<i>sôña bè, ômbè</i>	‘BSK., LIT. big taro’	(著者の調査データ)
<i>sôña flèra</i>	‘BSK., LIT. flower taro’	(著者の調査データ)
<i>saonjo kira</i>	‘SM., LIT. <i>kira</i> -like taro’	(Beaujard 2004: 62)

b. サトイモ *Colocasia esculenta* (‘taro, true taro, dasheen, cocoyam, etc.’)⁶⁾

<i>saonjo</i>	‘SM., <i>Colocasia</i> taro’	(Richardson 1885)
<i>sôña</i>	‘BSK., <i>Colocasia</i> taro’	(著者の調査データ)
<i>sauna, sahoña</i>	‘BSK., <i>Colocasia</i> taro’	(Boiteau <i>et al.</i> 1997)

(3)a のリストにあがっているクワズイモを表す語はみな複合語で, *soanjo*, *sao*, *sôña* といった語に修飾語がついている。これら3つの語は, (3)b にあげたように, もっとも一般的な食用種であるサトイモを示す。したがって, マラガシ語のクワズイモに対する名称は, 文字どおりには, 「*via* (ティフォノドルム) のようなサトイモ」, 「大きいサトイモ」, 「観葉のサトイモ (*flèra* < フランス語 *fleur*)」を意味することになる。クワズイモの名称がティフォノドルムとサトイモを示す名称の複合形で現れることから, クワズイモは, サトイモ科の他の2つの植物が人々の生活のなかに定着した後で入ってきたのだということがわかる。また, その組み合わせ (修飾語の内容) が言語によりさまざまであることは, クワズイモを示す語彙がそれぞれの言語で独自に発達したということを示しており, 時期的には, マダガスカル島内での初期のオーストロネシアンの拡散より後のできごとであることをも示している。

(3)a にあげたクワズイモを示す語の中には *saonjo kira* という語がある。この語の後半部分の *kira* という形について Beaujard (2004) は, 祖語 **biRaq* から直接発達したものではなく, マレー諸語のいずれかの言語からの借用であろうと述べている。*v* が *k* に置き換わるという特殊な音変化がマラガシ諸語におけるいくつかの言語において確認されているため, *kira* が *viha* もしくは *via* の対応形である可能性はあるのだが, 問題は語中の *r* で, **R* はマラガシ諸語では *h* もしくは *Ø* で実現する。一方, マレー諸語では **R* は *r* で実現するので, マレー諸語に属する言語から *vira* という形で持ち込まれたものが, *v* から *k* への変化を経て *kira* となったのだと考えるとつじつまが合うというわけである。もしこの言語分析が正しく, Adelaar (1995) が主張するようにマダガスカル島にオーストロネシア人が定住した後, インドネシアとの行き来があったとすれば, マレー系の商人が訪れてきたときにクワズイモと, その名称である *vira* という語と一緒にもたらされたと考えられることになる。

このように単語の実現形やその音対応を見ることで先史の暮らしについて推論することができるが, これは動植物名に限ったことではなく, 対象とする言語における社会組織やモノを示す語などにもあてはまる。

4 語データと先史研究 (II): 代名詞

マラガシ語の地域言語が標準マラガシ語とは異なる多くの特徴を有することは先に述べたが, これはものの名前に限られたことではなく, 文法的な語や形態素についても同じである。代名詞の体系もその1つであり, 地域言語間で, 形態および機能 (使い方) の両方に違いがみられる。本節 4.1 では, まずそのような違いの具体例を示すために, マラガシ諸言語の中から, 標準マラガシ語とベツィミサラカ・マラガシ語 (以後, 「ベツィミサラカ語」) の2つの代名詞体系をとりあげ, 概要を述べる。4.2 ではマラガシ祖語の

代名詞の体系の再建形の一部を示し、地域言語にみられる異なる形態が過去の代名詞の体系を再建するうえでの鍵となること、また再建された代名詞の体系が過去の民族間の関係を反映していることを示す。

4.1 2つのマラガシ語における代名詞の体系

表1、表2は、標準マラガシ語とベツィミサラカ語のそれぞれの代名詞の体系を示したものである。いずれにおいても、一人称から三人称の区別、一人称においては除外形と包括形の区別、またいずれの人称においても単数・複数の区別がある⁷⁾。

表1 標準マラガシ語の代名詞 (Rajaobelina 2001: 77, Rasoloson and Rubino 2005: 467-468, Rajaonarimanana 2001: 45-47にもとづく)

	独立代名詞 (主格)	斜格*	属格(I)	属格(II)**	所有表現	随伴表現
一人称単数	<i>izàho/àho</i>	<i>àhi</i>	<i>=ko</i>	<i>=C₁o</i>		
二人称単数	<i>ianào</i>	<i>anào</i>	<i>=nào</i>	<i>=C₁ào</i>		
三人称	<i>Izi</i>	<i>àzi</i>	<i>=ni</i>	<i>=ni</i>		
一人称複数除外形	<i>izahàì</i>	<i>anài</i>	<i>=nài</i>	<i>=C₁ài</i>	<i>ni +</i> 斜格代名詞	<i>ami +</i> 属格(I)代名詞 [†]
一人称複数包括形	<i>isika</i>	<i>antsika</i>	<i>=ntsika</i>	<i>=tsika</i>		
二人称複数	<i>ianarèò</i>	<i>anarèò</i>	<i>=narèò</i>	<i>=C₁arèò</i>		
(三人称複数)	<i>izi irèò</i>	<i>àzi irèò</i>	<i>=n'izi irèò</i>	<i>=ni</i>		

* この項に現れる形は、Rasoloson 2001では「対格」、Rasoloson and Rubino 2005では「与格」、Rajaobelina 2001では「直接目的語」という名称で記述されている。

** 属格(II)の形は、名詞の語尾の形が *-tra* もしくは *-ka* である場合に用いられる。C₁は、/tr/ または /k/ (名詞の最後のシラブルに現れる子音)を表す。本文2)形態音韻論的相違の項参照。

† Rajaobelina (2001: 77) では、一人称複数除外形・包括形ともに同じ *aminsika* があげられているが、同じ著書内のワードリストには、表1で示されたパターンに準じる *aminay* が包括形としてあげられている。

表2 ベツィミサラカ語の代名詞 (著者の調査データ)

	独立代名詞 (主格)	斜格*	属格	所有表現	随伴表現
一人称単数	<i>zàhu~zà:</i>	<i>anàhi</i> [*]	<i>=ko, =ki</i>	<i>annàhi</i>	<i>aminàhi</i>
二人称単数	<i>anô</i>	<i>annô</i>	<i>=nô</i>	<i>annô</i>	<i>aminô</i>
三人称単数	<i>izi</i>	<i>anànji</i> [*]	<i>=ni</i>	<i>aninànji</i>	<i>aminànji</i>
一人称複数除外形	<i>zehè</i>	<i>annè</i>	<i>=nè</i>	<i>annè</i>	<i>aminè</i>
一人称複数包括形	<i>atsik'a</i>	<i>antsik'a</i>	<i>=ntsik'a</i>	<i>anintsik'a</i>	<i>ami(n)tsik'a</i>
二人称複数	<i>anaré</i>	<i>annaré</i>	<i>=naré</i>	<i>annaré</i>	<i>aminaré</i>
三人称複数	<i>zaré</i>	<i>anjaré</i>	<i>=njaré</i>	<i>aninjaré</i>	<i>aminjaré</i>

* 一人称単数形 *anàhi* と三人称単数形 *anànji* は、名詞に後続する位置で対応する属格形と入れ代わり、「私の〜」もしくは「彼/彼女/その〜」という意味をあらわす。

これら2つの体系には、以下に示すように、1) 音声・音韻面、2) 形態音韻論的な特徴、3) 形態など、多くの点で違いがみられる。

1) 音対応

標準マラガシ語とベツィミサラカ語の間のいくつかの音対応は上に呈示した表1および表2のデータからも確認できる。これらの音対応は代名詞のみではなく、両言語間の他の語彙においても一般的にみられるものである。

(4) 二重母音と短母音の音対応

標準マラガシ語	<i>ai</i>	[ai]	<i>eo</i>	[eu]	<i>ao</i>	[au]
ベツィミサラカ語	<i>è</i>	[ɛ]	<i>é</i>	[e]	<i>ó</i>	[o:]

(5) ベツィミサラカ語の母音 /i/ あるいは /e/ に後続する音節における軟口蓋閉鎖音の口蓋化

標準マラガシ語	<i>antsika</i>	一人称複数包括形斜格
ベツィミサラカ語	<i>antsik^ɰa</i>	一人称複数包括形斜格

(6) 子音の音対応（非規則的）

標準マラガシ語	<i>s</i>	[s]	<i>isika</i>	一人称複数包括形独立形
ベツィミサラカ語	<i>ts</i>	[ts]	<i>atsik^ɰa</i>	一人称複数包括形独立形

2) 形態音韻論的相違

標準マラガシ語およびベツィミサラカ五語には、いずれにも、属格形が存在し、①名詞を修飾して所有者を表す、②他動詞文の行為者を表す、という機能を持つ点で共通している。また形の上ではいずれも繫辞（clitic）である。ただし、両言語の間には次のような相違点がみられる。

- a. 標準マラガシ語では、属格形が表1の属格(I)と属格(II)の間で交替する。属格(I)の組は、(7)aのように先行する語の語末が *-ka*, *-tra*, *-na* のいずれでもないとき、そのまま語につく。先行する語の語末が *-na* の場合には、(7)bにみられるように、語末音節の *-na* と、属格(I)が交代する。先行する語が *-ka* あるいは *-tra* で終わるときは、(7)cのように母音の部分が交代する。一方、ベツィミサラカ語には属格代名詞はひと組しか存在せず、(8)a, bにみられるようにそのまま語につくか、(8)cのように語末の *-tra* と交替するかのいずれかである。

(7) 標準マラガシ語

- a. *vola=ko* (< *vola*)
money=1SG.GEN
“私のお金” (Rajaonarimanana 2001: 46)
- hita=ko* (< *hita*)
see=1SG.GEN
“私は (それを) 見た” (Rasoloson 2001: 14)
- b. *tana=ko* (< *tanana*)
hand=1SG.GEN
“私の手” (Rajaonarimanana 2001: 46)
- kàvi=ko* (< *kàvina*)
earring=1SG.GEN
“私のイヤリング” (Rasoloson and Rubino 2005: 468)
- c. *fàntatr=o* (< *fantatra*)
know=1SG.GEN
“私は (それについて) 知っている” (Rajaonarimanana 2001: 46)
- pèratr=ào* (< *pèratra*)
ring=2SG.GEN
“あなたの指輪” (Rasoloson and Rubino 2005: 468)

(8) ベツイミサラカ語 (著者の調査データ)

- a. *vôla=ko* (< *vôla*)
money=1SG.GEN
“私のお金”
- ità=ko* (< *(na)ità*)
see=1SG.GEN
“私は (それを) 見る”

- b. *tànana=ko* (*< tànana*)

hand=1SG.GEN

“私の手”

- cf. *kàvi=ko* (*< kavi*)

earring=1SG.GEN

“私のイヤリング”

- c. *fànta=o* (*< fantatra*)

know=1SG.GEN

“私は（それについて）知っている”

- b. ベツィミサラカ語では、一人称属格形が、先行する音節の母音により=*ko*と=*ki*の間で交替する⁸⁾。この交替は標準マラガシ語には見られない。

(9) ベツィミサラカ語

- a. *iènti=ki*

FUT.carry=1SG.GEN

“私は（それを）運ぶ”

ità=ko

FUT.see=1SG.GEN

“私は（それを）見る”

3) 形態およびパラダイムにおける相違

- a. ベツィミサラカ語では、代名詞の斜格形と同形の一人称単数形 *anàhi*, 三人称単数形 *anànji* が, (10) のように名詞の所有者を示す機能を持つ。これらは他動詞文の行為者を表すことはない。

(10) ベツィミサラカ語

- a. *èntañà anàhi*

baggage 1SG.GEN

“私のカバン”

- b. **ienti anàhi*

FUT.carry 1SG.GEN

“I.M. 私は（それを）運ぶ”

- b. 標準マラガシ語では、すべての独立代名詞は *i-* で始まる形である一方、ベツィミサ

ラカ語では三人称単数形のみ、語等に *i-* があらわれる。

- c. 「私のもの」、「あなたのもの」等の所有の表現のしかたは2つの言語で異なる。(11) にみられるように、標準マラガシ語では所有表現は *ni*+斜格形となるが、ベツィミサラカ語では *an(i)-* という形ではじまる代名詞の組が存在する。

(11) 所有表現の比較

	“私のもの”	“彼のもの”	“彼らのもの”
標準マラガシ語	<i>ni àhi</i>	<i>ni àzi</i>	<i>ni àzi (irèu)</i>
ベツィミサラカ語	<i>annàhi</i>	<i>aninànji</i>	<i>aninjaré</i>

- d. 標準マラガシ語とベツィミサラカ語の随伴表現には、(12) にみられるように細かな点で違いがみられる。標準マラガシ語では、前置詞 *ami*+属格(I)で表現される。ベツィミサラカ語では原則は同じだが、一人称単数と三人称単数形は例外となっており、対応する所有表現、すなわち *anàhi*, *anànji* と形が一部共通している。

(12) 随伴表現の比較

	一人称単数	三人称単数	一人称複数除外形
標準マラガシ語	<i>ami=ko</i>	<i>ami=ni</i>	<i>ami=nài</i>
ベツィミサラカ語	<i>ami=nàhi</i>	<i>ami=nànji</i>	<i>ami=né</i>

- e. 最後に、三人称代名詞形について以下の点で相違がある。まず、形が異なる語がいくつかある。つぎに、数の区別において違いがある。標準マラガシ語では三人称代名詞形は、基本的に単複の区別なく使われるが、複数であることを明示する必要がある場合には、複数接辞 *irèu* を用いることができる。一方ベツィミサラカ語では単複の区別は区別されるのが普通で、無生物の場合には、複数の対象についても単数系を用いることができる。

以上より、マラガシ語のなかの2つの言語の代名詞のみをとりあげても、その間にかなりの違いがあるということがわかる。

4.2 代名詞に反映される歴史

4.1節では、標準マラガシ語とベツィミサラカ語のふたつの代名詞の体系間の違いについて述べたが、他の地域言語を考慮にいれると、違いの幅はさらに大きくなる。そのような違いは、オーストロネシア人がマダガスカルに定住し各地に分散した後、それぞれ

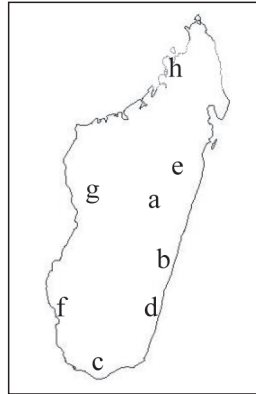


図2 この節で言及する言語のおおよその位置
(各記号に対する名称は(13)参照。)

の地域で起こった変化を反映しており、人々の先史についての推論を導き出すための手がかりとなる。この章では、一見、言語学的な特徴でしかありえないように思われる代名詞の体系の比較・再建の一部を紹介し、その内容が先史における出来事と関連づけられることを示す。

(13) に対象とする言語をデータの出典とともにあげた。それぞれの言語の話されているおおよその位置については、図2に示してある⁹⁾。

(13) この節で言及する地域言語一覧

言語名	本節での呼び方	データの出典
a. 標準マラガシ語		(諸文献)
b. タナラ・マラガシ語	タナラ語	(Beaujard 1998)
c. バラ・マラガシ語	バラ語	(Rabenilaina 1983)
d. アンタイサカ・マラガシ語	アンタイサカ語	(Deschamps 1936)
e. 北ベツィミサラカ・マラガシ語	ベツィミサラカ語	(著者の調査データ)
f. アンタンヂュイ・マラガシ語	アンタンヂュイ語	(Rajaonarimanana and Fee 2001)
g. サカラヴァ・マラガシ語(1)	サカラヴァ語(1)	(Dahl 1968)
h. サカラヴァ・マラガシ語(2)	サカラヴァ語(2)	(Thomas-Fattier 1982)

4.2.1 三人称代名詞の比較研究

この節では、マラガシ祖語の形を再建する目的で、三人称代名詞に焦点を当てる。8つの言語における代名詞形を表3に示す。

4.1節で述べたように、標準マラガシ語とベツィミサラカ語の間では三人称代名詞の数に関して相違がみられる。標準マラガシ語では、三人称代名詞は基本的に同じ形で単数

表3 8つのマラガシ地域言語における三人称代名詞

	単数 主格形	複数 主格形	単数 斜格形	複数 斜格形	単数 属格形	複数 属格形
a. 標準マラガシ語	<i>izi</i>	<i>izi ireo</i>	<i>azi</i>	<i>azi</i> (<i>ireo</i>)	<i>=ni</i>	<i>=n</i> + 複数主格形
b. タナラ語	<i>izi,</i> <i>i</i>	<i>izi ireo,</i> <i>rizareo</i>	<i>anazi</i>		<i>=ni</i>	
c. バラ語	<i>i,</i> <i>ii</i>		<i>àzi</i> (<i>anazi</i>) (<i>andri</i>)		<i>=ni</i>	
d. アンタイサカ語	<i>izi</i>		<i>azi,</i> <i>anazi,</i> <i>enazi</i>		<i>=ni</i>	
e. 北ベツィミサラカ語	<i>izi</i>	<i>zaré</i>	<i>ananji</i>	<i>njaré</i>	<i>=ni</i>	<i>=njaré</i>
f. アンタンヂユイ語	<i>ie,</i> <i>rèke</i>	<i>iareo</i>	<i>aze</i>	<i>iareo</i>	<i>=?e</i>	<i>=?iereo</i>
g. サカラヴァ語(1)	<i>ire,</i> <i>ri,</i> <i>rike</i>	<i>reo,</i> <i>roze</i>	<i>aze,</i> <i>andri,</i> <i>andike</i>	<i>androze,</i> <i>andreo</i>	<i>=ne,</i> <i>=ndri,</i> <i>=drike</i>	<i>=droze,</i> <i>=dreo</i>
h. サカラヴァ語(2)	<i>izi,</i> <i>azi</i>	<i>iro</i>				

も複数も表すことができるが、ベツィミサラカ語では、通常、単数と複数の区別がみられる。これに対して、表3にみられるように、バラ語やアンタイサカ語では三人称では数の区別はしない。アンタンヂユイ語と、サカラヴァ語の2つの言語はベツィミサラカ語同様、単数と複数が区別される。

代名詞の形態そのものにもかなりの違いがみられる。たとえば、三人称単数の主格形には *i, ii, ie, ri, izi, azi, rike, rèke* のように8つの異なる語形が、同様に複数主格形には10の異なる語形が認められる。状況は、他の人称と数においても同じである。

このようにさまざまな語形が存在するため、代名詞を比べるだけでも音対応の一部をかいまみることができる。41でみた標準マラガシ語とベツィミサラカ語間での対応に加え、たとえばアンタンヂユイ語とサカラヴァ語(1)の語末の /e/ は、サカラヴァ語(2)の /i/ に対応していることが、表3からみてとれる。

アンタンヂユイ語では、他の言語において /n/ で始まる属格形が正門閉鎖音の /ʔ/ で始まっている。このことは、アンタンヂユイ語において形態的音韻論的变化 *=ni* から *=ʔi* (さらに *=?e*) が起こったことを示している。

三人称以外の代名詞の形態等を加味すると、独立代名詞主格形を語頭の *i の形成素を持つものと、持たないものの2つのグループに分類することができ、同様に、斜格形も

語頭接辞の *an を持つものと、持たないものの2つに分類することができる。このような分析をすすめると、さまざまな形態の代名詞を起源にもとづき整理しなおすることができる。表3に示したもののなかから三人称単数主格形代名詞を語源にしたがって整理したものを表4に、また、再建した三人称単数形と現在みられる形・機能への発達経緯を表5に示す。

表4では起源が同じ語形を同じ行に並べてある。たとえば、2行目のバラ語の *ii* とアンタンヂュイ語の *ie* は、後者で語末の /i/ が /e/ へと変化したと特定することができ、同様に、サカラヴァ語の *rike* とアンタンヂュイ語 *rèke* も同じ起源を持つと考えることができる。この表における各語の対応を他の人称および数における語彙の比較から得ら

表4 三人称代名詞独立主格形（語源によって整理したもの）

サカラ ヴァ語(1)	サカラ ヴァ語(2)	タナラ語	アンタ イサカ語	バラ語	標準マラ ガシ語	ベツイミ サラカ語	アンタン ヂュイ語
		<i>i</i>		<i>i</i>			
				<i>ii</i>			<i>ie</i>
	<i>izi</i>	<i>izi</i>	<i>izi</i>		<i>izi</i>	<i>izi</i>	
	(<i>àzi</i> < OBL)						
<i>ire, ri</i>							
<i>rike</i>							<i>rèke</i>

*ia「三人称単数、主格形」(tandroy *ie* < *ia)

注 *izi* は、メリナにおいて、おそらく **iia* < **i* + **ia* から独立に発達した形であり、それが他の言語に拡がったと考えられる。*rike, rèke, ri, ire* などといった形の語源は明らかではないが、ここでは関連する可能性のある変化として、固有名詞において /z/ と /r/ の交替がみられるものがあることを記しておく。

表5 マラガシ祖語形とその後の変化

(三人称単数、矢印は一般化、点線枠は派生関係が規則的であることを示す)

	主格形		斜格形 / 所格形		属格形
祖形	*ia		*azi	*an-azi	*=ni
規則的な発達形	<i>i</i> (TNL, BAR) <i>ii</i> (BAR) <i>ie</i> (TDR)		<i>azi</i> (SKL, TSK, BAR, MRN) <i>aze</i> (TDR)	<i>anazi</i> (TNL, TSK, BAR) <i>ananji</i> (BSK)	<i>=ni</i> (all) <i>=?e</i> (TDR)
不規則な発達形		<i>azi</i> (SKL) <i>izi</i> (< <i>i</i> + <i>azi</i> ?) (MRN+)			<i>ananji</i> (BSK)
		<i>ire, ri</i> (< <i>ra</i> + <i>i, ie</i>) (SKL) <i>rike</i> (SKL) <i>rèke</i> (TDR)		<i>andri</i> (< <i>an</i> + <i>ri</i>) (SKL, BAR) <i>andrike</i> (< <i>an</i> + <i>rike</i>) (SKL)	<i>=ndri</i> (< <i>=n</i> + <i>ri</i> ?) (SKL) <i>=ndrike</i> (< <i>=n</i> + <i>rike</i>) (SKL)

れる形態素に関する情報とつきあわせることにより、三人称単数代名詞がどのように発達したのかを再建することができる。

表5では、再建形、そこから直接および間接に発達した語形を、それぞれの語源にしたがって整理した。再建の方法およびその妥当性の詳細に関する検証については他の場に譲ることにし (Adelaar and Kikusawa in prep.; Kikusawa 2005), 以下では再建された体系を説明するにとどめる。

表5には、三人称単数に関わる語形を、それぞれがみられる地域とともに示してある。たとえば、三人称独立主格形を表わす *i* という語は、タナラ (TNL), パラ (BAR) で使われている。点線で囲まれた部分は新しくできた語形とその派生形を示しており、特定の地域での発達を示す。マラガシ諸語内外の関連する語形と比較すると、*i, ii, ie* がより古い起源をもち、それが *ri, rèke, rike* という語に置き換わったことがわかる。興味深いことに、これらの新しい語はそれぞれ斜格形 *andri, andrike*, 属格形 *ndri, ndrike* となっており、すでに存在していた3つの格の派生規則 (斜格 *an-, 属格 *=n) に従った形となっている。このことは、*ri, rèke, rike* への置換が起こった時点で、斜格および属格を示す接頭辞は言語学的に生産的であったことを裏付けている。

図の中の矢印は意味的拡張や音変化を示すが、この図からは、再建された格機能内だけではなく、他の格にまたがって変化が起こったことがわかる。たとえば、今日サカラヴァ語で *azi* という語は主格形としても斜格形としても用いられるが、これは **azi* のもとの機能である斜格標示という機能範囲が拡張し、主格形としての文法機能をも担うようになった結果である¹⁰⁾。斜格形には、現在マラガシ諸語でみられる三人称斜格形にもとづくと **azi*, **an-azi* という2つの異なる語形の再建が必要である。このなかの **an-azi* から発達したベツイミサラカ語の斜格形 *ananji* は、機能を拡張し、斜格のみならず属格形として所有者を標示するようになった。これは、ベツイミサラカのみにもみられる変化となっている。

さらに、不規則な発達形の主格形のひとつ *izi* は、もっとも広い分布を示す。このことから *izi* については、標準マラガシ語の基礎となっているメリナ語で発達し、標準マラガシ語が広まるにつれ、他の言語にも広がったのだと考えられる。

4.2.2 再建形に反映される歴史

表5の代名詞の語の発達を地図の上に表すと、図3 a-d および図4 a-c のようになる。

まず、古い語である *i, ii, ie* はサカラヴァ、パラ、アンダンヂュイ (図3 a) に位置しており、新たに発達した語形 *ri, rike, rèke* の分布は、その古い語の分布と重なる (図3 b)。つぎに、*izi* という語はメリナで発達し、その周辺地域へと広がった (図3 c)。最後に、*ananji, ananzi* という語の分布は、東沿岸地域に限られている (図3 d)。

三人称代名詞の地理的分布をみると、地域言語にみられるさまざまな語形の発達の経



図3a *i, ii, ie*が記録された地域

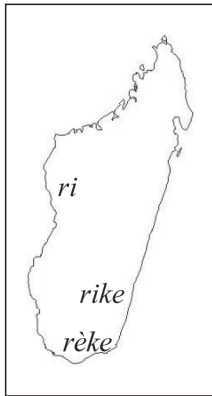


図3b *ri, rike*が記録された地域

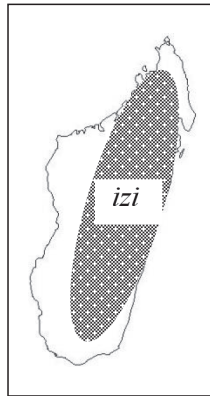


図3c *izi*が用いられる地域



図3d *ananji, anazi*が記録された地域

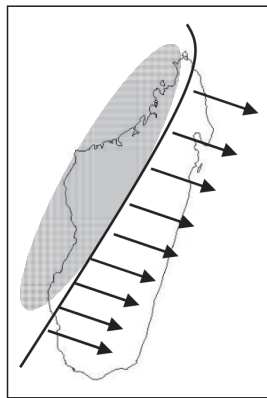


図4a サカラヴァ王国の位置とその影響

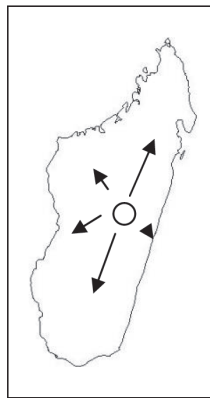


図4b メリナ語から諸言語への影響

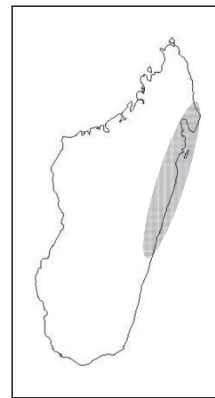


図4c ベツィミサラカ地域

緯をマダガスカルの先史および歴史時代における出来事に関連づけることができる。

マラガシ祖語の三人称単数主格形 *ia は、マラガシ祖語の前段階から直接受け継がれた語であり、人々がマダガスカル島へ拡がって行くと同時に広まった。定住後、各地域で独自に起こった音変化の結果、現在みられる語形 *i, ii, ie* へと変化した。しかし、アンタンデュイでは別の三人称単数主格形 *reke* が現れる。これはサカラヴァでの語 *rike* と同源と見られ、サカラヴァでは他の格を示す語形を含めて三人称単数形の基礎となった。16世紀後半にサカラヴァは西部に王国を築き、マダガスカルの他の地域に1世紀以上に渡って影響を及ぼしたことが知られている。したがって考えられるのは、*rike* (のもとになった語形) はおそらくサカラヴァで発達し、サカラヴァ王国が力をつけ強い影響力を持ち始めるにつれ周辺の地域に広まったと考えられる (図4a)。その影響力は、サカラヴァから他の地域へ広まったと考えられる語彙の数にも反映されている (Kikusawa

2005)。一方で現在、辺縁地域を除いてもっとも広範囲でみられるのは主格形 *izi* とその斜格形 *àzi* であり、これらの語がほとんどそのままの形（すなわち音変化を経ずに）広い地域言語を通じてみられることから、比較的近年になってから広まったことがわかる。さらに、*izi* と *àzi* がメリナ語（標準マラガシ語）でみられる語形であることを考えると、最も理にかなった説明は、これらの語がメリナで発達し、この地域の人々が政治的に力をもつにつれて他の地域に広がった、というものであろう（図4b）。最後に、東沿岸部でのみみられる斜格形 *ananji* と *anazi* は、メリナ語から *àzi* を受け入れた後にこの地域で独自に起こった変化の結果であると考えられる（図4c）。

5 まとめ

伝統的にひとつの名称で呼ばれてきた言語、また、国が発達するなかで「標準語」が発達した言語のなかに相当の多様性が存在することは珍しくない。本論文で考察した言語はマダガスカルの諸地域言語である。ここでは限られた例しか提示できなかったに関わらず、地域言語にみられる多様性は、音韻から語用論まで言語学的特徴の全域にわたっており、それらすべての特徴が標準語が広がるにつれて消滅する可能性があることは強く認識される必要がある。Klötter (2005: 895) による「“中国語はひとつの言語である” というのは、中国語について広くみられる誤解である」という主張は、中国語だけでなく、話者数が多く、一般には危機に瀕した言語という文脈では対象とならない他の多くの言語に当てはまり、マラガシ語はその中のほんのひとつである。

本稿では、異なる2組のデータを通して、マラガシ語における地域言語の存在が歴史言語学の研究において豊富な情報源であることを示そうと試みた。サトイモ科植物の地域言語における名称からは、最初にオーストロネシアンがマダガスカルに定住したときに存在した植物や、その後マダガスカルにもたらされた植物についての推論が可能となった。代名詞の比較再建からは、地域言語がいかにバラエティ豊かであるか、また、そこにどのように先史の社会の動きが反映されているのかをみた。

今後マダガスカルの経済成長がすすみ、幹線道路等の建設にともなうにつれ、地域間の往来がしやすくなり辺縁地域の電力化がもたらされる等、さまざまな生活面での変化がおこる。それにともない、すでにはじまっている標準マラガシ語の地域言語への影響がより強くなり、地域言語の特徴が急速に失われていくことが予測される。急速な画一化は、語彙や形態統語的な特徴（これらはとくに、書記法の導入の結果促進されることが多い）、かしこまった文脈においての言い回し表現、そして音韻体系等、さまざまな側面における変化を引きおこす。

本稿において述べたかったことは、地域言語が標準語よりも類型論的に稀で珍しい特徴を示すだとか、言語という実態として風変わりであるということではない。地域言語には

標準語と比べて異なる特徴、しばしば歴史的な分析において重要な役割をもつ特徴がみられることが多い一方、標準語は、その規範化（形成過程）においてさまざまな特徴が中立化されることが多く、歴史言語学的な側面からは失われてしまう情報が多い。残念ながら、地域言語固有の特徴は、これまでにない速さで失われつつある。この状況への唯一の言語学的対応は、そのような地域言語の存在について話者数が少ない危機に瀕した言語に対するのと同様の認識を持ち、できるだけ多く記録保存につとめることである。

略号表

略号	意 味	英 文
BAR	バラ（語、地域）	Bara (region, language)
BTL	ベツイレオ（語、地域）	Betsileo (region, language)
BSK	ベツイミサラカ（語、地域）	Betsimisaraka (region, language)
FUT	未来	future (tense)
I.M.	意図された意味	intended meaning
LIT.	文字通りの意味	literally
MRN	メリナ（語、地域）	Merina (region, language)
SG	単数	singular
SKL	サカラヴァ（語、地域）	Sakalava (region, language)
SM	標準マラガシ語	Standard Malagasy
SHN	シハナカ（語、地域）	Sihanaka (region, language)
SJ	標準日本語	Standard Japanese
TDR	アンタンデュイ（語、地域）	Taudroy (region, language)
TNL	タナラ（語、地域）	Tañala (region, language)
TSK	アンタイサカ（語、地域）	Antaisaka (region, language)
1	一人称	first person
2	二人称	second person

注

- 1) 本稿は、第3回オックスフォード神戸セミナー「絶滅の危機に瀕する言語の言語学」（2006年4月2～5日、オックスフォード神戸インスティテュート）での講演内容を訳したものである。翻訳にあたっては、京都大学非常勤講師の松本亮氏にお世話になった。ここに記して感謝の意を表する。本論文内でつかわれる略号については、本文末の略号表参照。
- 2) 標準フィジー語は、英語とフィジー・ヒンドスタニ語とならび、フィジー諸島共和国の公用語である。標準マラガシ語は、フランス語とともにマダガスカル共和国の公用語となっている。本文で言及した3つの言語の地域言語の記述に関しては、Geraghty 1983, Pawley and Sayaba 1971, Schütz 1963（フィジー語）、Andriamanantsilavo and Ratrema 1982,

- Beaujard 1998, Gueunier 1988, Vérin *et al.* 1970 (マラガシ語), Shibatani 1990: 185-214 (日本語) などがある。
- 3) マラガシ語のオーストロネシア語族における位置づけの研究史のまとめについては, Adelaar (1995: 325-331) 参照。
 - 4) 標準語は土台となった地域言語とは異なる特徴を示すことが多いが, これらのふたつの言語が常に意識的に区別されているわけではない。マラガシ語における「メリナ語」と「標準マラガシ語」についても同様のことが言える。
 - 5) Boiteau *et al.* (1997) にあげられているティフォノドルムを表わす他の語は: *horiridrano* (Richardson 1885では 'k.o. water lily' と定義), *mangaoka*, *mangoka*, *mangibo*, *mangilo*. *hororodrano* という語は, *horirika* 「サトイモの葉」(Richardson 1885) と, *(d)rano* “水(の)” という2つの語の複合形である。その他の語形はすべて, 各地で当該植物に関する状況を示す語から独自生まれた語のようだ。たとえば Boiteau *et al.* (1997) は, *mangoka* という語はおそらく *hohoka* 「飢饉, 食糧の欠乏」というその地域の人々ティフォノドルムを食用にしていたのであろう状況を示す語からきたのだろうと考えている。
 - 6) Beaujard (2004: 62) によれば, *saonjo* (とその関連語) という語は, 東アフリカ, さらにイエメンに遡る。オーストロネシア諸語におけるクワズイモを表わす語は, PAN **taleS* (Wolff 1994), そして POC **talo* (French-Wright 1983)。Boiteau *et al.* (1999: 29) は, 「マレー・ポリネシア起源」である *taloe* という語がタナラで使用され, マダガスカルの他の地域では, 「より近年にもたらされた」*saonjo* や他の類似した後が使われていると述べている。
 - 7) 標準マラガシ語の正書法では, 語末の狭前舌母音 [i] は y で示し, 他の位置では i と表記する。本論文では一貫性を重視し, 両方とも *i* で表記する。他の表記文字と音価は次の通りである: *o* [u], *ô* [o], *è* [ɛ], *é* [e], *ñ* [ɲ]。'´' は主強勢を表し, 原典の表記に従う。
 - 8) このことは (5) で示した現象に関連している (Kikusawa 2005: 13-14)。
 - 9) マラガシ諸語の主要な辞書及び記述文法のリストについては, Rasoloson and Rubino 2005: 458-459参照。
 - 10) マラガシ語の代名詞系の再建については, Kikusawa 2005, Adelaar and Kikusawa in prep. 参照。実際の再建作業では, 各人称・数についての対応表を扱うため, 表3のようなものを7つ並行して扱うことになる。異なる人称や数の間に広がった語彙的な特徴もみられ, 全体像を複雑にしている。

文 献

- Adelaar, K. A.
- 1991 New Ideas on the Early History of Malagasy. In H. Steinbauer (ed.) *Papers in Austronesian Linguistics 2, Pacific Linguistics, A-81*, pp. 1-22. Canberra: Pacific Linguistics.
 - 1995 Asian Roots of the Malagasy: A Linguistic perspective. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 151(3): 325-356.
 - 2010 Bantu-Malagasy Contact Phenomena. Paper presented at a meeting of the project “Subgrouping Languages: Examining Genetic Relationships and Their Implications in Human History” (Convenor: R. Kikusawa) (September 4, 2011. National Museum

- of Ethnology, Osaka).
- Adelaar, K. A. and R. Kikusawa
in prep. Proto-Malagasy pronominal system: A reconstruction.
- Andriamanantsilavo, S. and W. Ratrema
1982 *Ny fitsipi-pitenenantsika. Boky Voalohany*. Antananarivo: Imprimerie d'Ouvrages
Educatifs Ankatso.
- Beaujard, P.
1998 *Dictionnaire Malgache-Français (dialecte tañala, Sud-Est de Madagascar) avec
recherches étymologiques*. Paris: L'Harmattan.
2004 Les arrivées austronésiennes à Madagascar: vagues ou continuum? *Langues et
cultures de l'océan Indien occidental, Études Océan Indien* 35-36: 59-148.
- Bellwood, P. G., Chambers, M. Ross, and H-c. Hung
2011 Are 'cultures' inherited? Multidisciplinary Perspectives on the Origins and
migrations of Austronesian-speaking Peoples Prior to 1000 BC. In B.W. Roberts and
M. V. Linden (eds.), *Investigating Archaeological Cultures: Material Culture,
Variability, and Transmission*, pp. 321-354. New York: Springer-Verlag.
- Blust, R. A.
2006 The Linguistic Macrohistory of the Philippines: Some Speculations. In H. Liao and
C. R. G. Rubino (eds.), *Current Issues in Philippine Linguistics and Anthropology:
Parangal kay Lawrence A. Reid*, pp. 31-68. Manila: The Linguistic Society of the
Philippines and SIL Philippines.
2012 ACD Blust's Austronesian Comparative Dictionary <http://www.trussel2.com/ACD/>
(29 December 2012).
- Boiteau, P., M. Boiteau, and L. Allorge-Boiteau
1997 *Index des noms scientifiques avec leurs équivalents malgaches (extrait du
Dictionnaire des noms malgaches de végétaux)*. Grenoble: Alzieu.
1999 *Dictionnaire des noms malgaches de végétal. Collection «nature»: flore de
Madagascar*. Grenoble: Alzieu.
- Dahl, O. C.
1968 *Contes malgaches en dialecte sakalava (textes, traductions, grammaire et lexique)*.
Oslo: Norway Universitetsforlaget.
1988 Bantu Substratum in Malagasy, *Etudes Océan Indien* 9: 91-132.
1991 *Migration from Kalimantan to Madagascar*. Oslo: The Institute for Comparative
Research in Human Culture, Norwegian University Press.
- Deschamps, H.
1936 *Le dialecte Antaisaka (langue malgache)*. Antananarivo: Pitoto de la Beaujardière.
- Dez, J.
1994 De l'influence arabe à Madagascar à l'aide de faits de linguistique. *Taloha* 2: 1-38
[Reprint of Taloha 2, published in 1967].
- Dyen, I.
1971 Malagasy. In Sebeok, T. (ed.), *Current Trends in Linguistics*, Vol. 8, pp. 211-239. The
Hague: Mouton.

- Ferrand, G.
1905 *Dictionnaire de la langue de Madagascar d'après l'édition de 1658 et l'histoire de la grande Isle Madagascar de 1661*. Paris: Ernest Leroux.
- French-Wright, R.
1983 *Proto-Oceanic Horticultural Practices*. MA thesis, University of Auckland.
- Geraghty, P.
1983 *The History of Fijian Languages* (Oceanic Linguistics Special Publications No. 19). Honolulu: University of Hawai'i.
- Gordon, R. G., Jr. (ed.)
2005 *Ethnologue: Languages of the World*, Fifteenth edition. Dallas, Tex.: SIL International.
Online version: <http://www.ethnologue.com/>
- Gueunier, N. J.
1988 Dialectologie et lexicostatistique: cas du dialecte malgache de Mayotte (Comores). *Etudes Océan Indien* 9: 143-167.
- Kikusawa, R.
2005 Reconstructing the Proto-Malagasy Pronominal System. Paper presented at the 17th International Conference on Historical Linguistics (ICHLXVII) (Wisconsin, July 31 -August 5).
- 菊澤律子
2003 「オセアニアのタロ —— 名称にもとづく系譜の特定」 吉田集而・堀田満・印東道子編『イモとヒト: 人類の生存を支えた根栽農耕 —— その起源と展開』, pp. 53-76, 東京: 平凡社。
2007 「オーストロネシア語族の広がり —— 言語学からみた「オセアニア文化」」 国立民族学博物館編『オセアニア —— 海の人類大移動』, pp. 41-45, 京都: 昭和堂。
- Klötter, H.
2005 Book review: Hilary Chappell (ed.) *Sinitic Grammar: Synchronic and Diachronic Perspectives*. Oxford: Oxford Press. *Lingua* 116: 895-902.
- 国立民族学博物館編
2007 『オセアニア —— 海の人類大移動』, 京都: 昭和堂。
- Mahdi, W.
1988 *Morphophonologische Besonderheiten und historische Phonologie des Malagasy*. Berlin: D. Reimer.
- Pawley, A. and T. R. Sayaba
1971 Fijian Dialect Divisions: Eastern and Western Fijian. *Journal of the Polynesian Society* 80: 405-436.
- Rebenilaina, R. B.
1983 *Morpho-syntaxe du malgache: description structurale du dialecte bàra*. Paris: SELAF.
- Rajaobelina, P. (with M. Rajaobelina-Bilbao)
2001 *Malgache: manao ahoana*. Paris: Bibliothèque Centre Pompidou.
- Rajaonarimanana, N.
2001 *Grammaire moderne de la langue malgache*. Paris: Langues & Mondes-L'Asiathèque.

- Rajaonarimanana, N. and S. Fee
 2001 *Dictionnaire malgache dialectal-français: dialecte tandrozy*. Paris: Langues et Mondes/L'Asiathèque.
- Rasoloson, J.
 2001 *Malagasy-English English-Malagasy Dictionary and Phrasebook*. New York: Hippocrene Books, Inc.
- Rasoloson, J. and C. Rubino
 2005 Malagasy. In A. Adelaar and N. P. Himmelmann (eds.), *The Austronesian Languages of Asia and Madagascar (Routledge Language Family Series)*, pp. 456–488. London and New York: Routledge.
- Razafintsalama
 1928 *La langue malgache et les origines malgaches: Le fond initial du vocabulaire malgache*. Antananarivo: G. Pitot & Cie.
- Richardson, J.
 1885 *A New Malagasy-English Dictionary*. Antananarivo: The London Missionary Society.
 Royal Botanic Gardens, Kew
 2012 <http://www.kew.org/> (28 December, 2012)
- 崎山理
 2009 「マダガスカルにおけるオーストロネシア系言語由来の植物名称の意味変化」『国立民族学博物館研究報告』33(2) : 227–264。
- Schütz, A. J.
 1963 A Phonetic Typology of Fijian Dialects. *Oceanic Linguistics* 2: 262–279.
- Serva, M., F. Petroni, D. Volchenkov, and S. Wichmann
 2011 Dialects of Malagasy and the Peopling of Madagascar. *Journal of the Royal Society Interface* 2012(9): 54–67, first published online 1 June 2011 doi: 10.1098/rsif.2011.0228.
- Shibatani, M.
 1990 *The languages of Japan. Cambridge Language Surveys*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Thomas-Fattier, D.
 1982 *Le dialecte Sakalava du Nord Ouest de Madagascar*. Paris: SELAF.
- van der Tuuk, H. N.
 1865 Outlines of a grammar of the Malagasy language. *Journal of the Royal Asiatic Society, New Series* I: 419–442.
- Vérin, P., C. Kottak, and P. Gorlin
 1970 The Glottochronology of Malagasy Speech Communities. *Oceanic Linguistics* 8(1): 26–83.
- Wolff, J. U.
 1994 The Place of Plant Names in Reconstructing Proto Austronesian. *Austronesian Terminologies: Continuity and Change. Pacific Linguistics*, C-127, pp. 511–540. Canberra: Pacific Linguistics.